

【4】比丘としての修行と生活

[0] 提婆達多¹の事績は破僧のみが喧伝され、出家・帰仏ののち破僧に到るまでの間にどのような修行生活や教団活動をしていたのかについては、語られることが極めて少ない。しかし、提婆達多が比丘としてどのような修行をしたのか、教団内でどのような位置にあり他の長老との関係はどのようなものであったのかなどは、破僧事件の実態に近づくために不可欠の要素と考えられる。ここでは提婆達多の比丘としての生活や修行ぶりがどのようなものであったのかということを検討する。

[1] 提婆達多の比丘としての修行あるいは生活に関する資料には次のようなものがある。破僧に関する直接的な記述は後に譲るが、概括的に述べるものはここに含める。罪惡を有する者という認識は後の破僧事件が投影されたものであろうが、ここに紹介するのは破僧以前の提婆達多のあり方を表していると考えられるものが含まれている。また提婆達多が神通力を修したということは先の出家資料にも出ている。したがってそこで取り上げなかったものをここで紹介する。なお修行ないしは生活ぶりを記述する部分には下線を施す。

[1-1] A文献資料には次のようなものがある。

- (1) 釈尊は多くの比丘らと一緒に経行されていた。舍利弗、目連、摩訶迦葉、阿那律、富留那、優波離、阿難、提婆達多も、釈尊の近くで多くの比丘らと共に経行していた。釈尊は比丘らに「舍利弗と一緒に経行している比丘は智慧の者たちであり、目連と一緒に比丘は大神通の者たち (mahiddhikā)、摩訶迦葉と一緒に比丘は頭陀説の者たち (dhutavādā)、阿那律と一緒に比丘は天眼者たち (dibbacakkhukā)、富留那と一緒に比丘は説法者たち (dhammakathikā)、優波離と一緒に比丘は持律者たち (vinayadharā)、阿難と一緒に比丘は多聞の者たち (bahussutā)、提婆達多と一緒に比丘は有罪の者たち (pāpicchā) である。そのように衆生は界と連関し、和合している」と説かれた。SN.014-015 (vol. II p.155)
- (2) 釈尊は比丘らに「衆生は常に界とともにあり、界と和合する。いわゆる不善心のときには不善の界が伴い、善心のときには善の界が伴うように、傾向を同じくする者が和合しあう。橋陳如は上座多聞にして久しく梵行を修する者、摩訶迦葉は少欲知足にして頭陀を行ずる者、舍利弗は大智弁才のある者、目連は神通力のある者、阿那律は天眼明徹の者、二十億耳は大衆の為に供具を修せる者、優波離は律行に通達せる者、富留那は弁才にして善く説法する者、摩訶迦旃延は諸經を分別し善く法相を説く者、阿難は多聞總持の者、羅睺羅は善く律行を持つ者、提婆達多は悪行を習う者と、近処で経行するように和合しあう。それ故によく界を分別すべきである」と説かれた。『雜阿含』447 (大正02 p.115上)
- (3) 釈尊が多数の衆生らに説法されているとき、舍利弗、大目乾連、大迦葉、阿那律、離越、迦旃延、滿願子、優波離、須菩提、羅云羅、阿難らは、各々多数の比丘たちを引連れて経行していた。提婆達多も比丘たちを率いて経行していた。ときに釈尊はこれを見られ、比丘たちに「人の根、情、性はそれぞれ相似ている。善なる者は善なるものと交わり、悪なる者は悪なるものと交わる。舍利弗のグループは皆智慧之士、目連のグルー

ブは皆是神足之士、迦葉のグループは皆是十一頭陀行法之人、阿那律のグループは皆天眼第一、離越のグループは皆是入定之士、迦旃延のグループは皆是分別義理之人、滿願子のグループは皆是説法之人、優波離のグループは皆是持禁律之人、須菩提のグループは皆是解空第一、羅云のグループは皆是戒具足士、阿難のグループは皆是多聞第一所受不忘、提婆達兜のグループは爲惡之首無有善本」と説かれた。『増一阿含』049-003 (大正02 p.795中)

- (4) 釈尊は比丘たちに「利得と尊敬と名声 (lābha-sakkāra-siloka)」に征服され、心が占領されて、提婆達多はサンガを破った」と説かれた。SN.017-031 (vol.II p.240)
- (5) 釈尊は比丘たちに「利得と尊敬と名声に征服され、心が占領されて、提婆達多は善根を断じるに至った」と説かれた。SN.017-032 (vol.II p.240)
- (6) 釈尊は比丘たちに「利得と尊敬と名声に征服され、心が占領されて、提婆達多の善法は断滅するに至った」と説かれた。SN.017-033 (vol.II p.240)
- (7) 釈尊は比丘たちに「利得と尊敬と名声に征服され、心が占領されて、提婆達多の白法は断滅するに至った」と説かれた。SN.017-034 (vol.II p.240)
- (8) 提婆達多が去って間もないころ、釈尊はこの靈鷲山の地に住された。そのとき釈尊は提婆達多について、「己の殺害と敗亡のために提婆達多に利得と尊敬と名声が生じた。竹や葦が果実を生じ、雌驢馬が子をはらむように」と説かれた。SN.017-035 (vol.II p.241)
- (9) 釈尊は500人の比丘らと共に、この迦蘭陀竹園に住された。ときにある比丘は「提婆達兜比丘者有大神力有大威勢。云何世尊。記彼一劫受罪重耶」と質問した。世尊は「ほんのわずかでも善法があれば、そのように記別しない。それ故に若し利養心が生じたならば滅することを求めなさい」と教誡された。『増一阿含』011-010 (大正02 p.567中)
- (10) 提婆達兜は鬚髪を剃り、袈裟を着て、自ら我は釈種子なりと称した。その時一比丘あり修羅陀と名づく。頭陀行乞食し、補納衣を著け、五通清徹せり。是の時提婆達兜は彼の比丘所に往至し、頭面礼足し前んで言った「唯願くは尊者、当に我のために教を説き、長夜に安穩を獲せしむべし」と。この時修羅陀比丘は、即ちために威儀礼節を説いた。「此法を思惟し、此れを捨し彼に就け」と。この時提婆達兜は彼の比丘の教の如くして漏失しなかつた。提婆達兜は比丘に言った。「唯願くは尊者当に我のために神足道を説くべし、我能く此道を修行するに堪任せん」と。その時比丘またために神足之道を説き、「汝今まさに心意の軽重を学ぶべし。已に心意の軽重を知れば、また当に四大地水火風の軽重を分別すべし。已に四大の軽重を知ることを得ば、便ち当に自在三昧を修行すべし。已に自在三昧を行ぜば、また当に勇猛三昧を修すべし。已に勇猛三昧を行ぜば、また当に心意三昧を修行すべし。已に心意三昧を行ぜば、また当に自戒三昧を行ずべし。已に自戒三昧を修行せば、是の如く久しからずして、便ち当に神足道を成ずべし」と。その時提婆達兜は師の教を受け已って、自ら心意の軽重を知り、また四大の軽重を知り、尽く諸の三昧を修して漏失する所無し。その時久しからずして便ち神足之道を成じ、是の如く無数に方便して変を作すこと無量なり。その時提婆達兜の名声は四遠に流布せり。『増一阿含』049-009 (大正02 p.802中)

- 〈11〉 わたしは聞いた。提婆達多は智者 (paṇḍita) と称され、身を修めた者 (bhāvitatta) と崇められ、誉れは焰のように高かった、と。懈怠をなし、如来を悩まして、彼は怖ろしい阿鼻地獄の四つの門に入った。Itivuttaka 89 (p.086)
- 〈12〉 提婆達多は在家のいる衆会で (sagahaṭṭhāya parisāya) 波羅提木叉を誦した。「在家のいる衆会で波羅提木叉を誦すべからず」。 Vinaya「布薩毘度」 (vol. I p.115)
- 〈13〉 世尊は水 (下痢) を患われた。耆婆がこれを治したが、瓶沙王を初めてとして諸々の王、舍利弗を初めとして諸々の比丘・比丘尼が見舞いに訪れた。提婆達多はこれを聞いて、世尊の服した薬を求めて服し重病を得た。しかし誰も見舞いに訪れなかった。世尊はこれを知り施薬の光明を身から出してこれを治した。『四分律』「衣毘度」 (大正 22 p.853 中)
- 〈14〉 調達は出家して比丘となって、十二年中善心修行、読経誦経問疑受法坐禅。爾時仏所説法皆悉読誦。時に諸比丘は神通によって天に行き、天食を食した。これを見て調達は神通力を得たいと思い、釈尊を初め舍利弗や目連に神通道を尋ねるが教えてもらえなかった。そこで、阿難は自分の弟だからと阿難のところに行った。阿難はまだ離欲していなかったので教えた。彼は世俗の四禅を得、神通力を得て、切利天などから食物を得、それを食した。『十誦律』「調達事」 (大正 23 p.257 上)
- [1-2] B 文献資料には次のようなものがある。
- (1) (〈1〉 SN.014-015 の註として) 何故彼等 (舍利弗等) は近くを經行したのか。「デーヴァダッタは師に悪意を持っており、不利益をなそうとするであろう」と考えて、守護のために世尊の近くを經行した。その時デーヴァダッタはどうして經行したのか。「こいつは悪いことをしないでだろう。もしも悪いことをしようとする者であれば、ここに来ないだろう」と思わせて自身の為した過失を隠すために。SN.-A. (vol. II p.141)
- (2) 世尊はアヌピヤーナガラ (Anupiyānagara) の近くのアヌピヤアンバ園 (Anupiyambavana) に住されていた。そのとき、バツディヤ、キンピラ、バグ、ウパーリが阿羅漢果、アーナンダが預流果、アヌルッダが天眼、デーヴァダッタが禅定を得た (jhānalābhī jāto)。Jātaka 010 Sukhavihāri-j. (vol. I p.140)
- (3) 世尊は王舎城・迦蘭陀竹林園におられた。そのとき儉歳 (五穀の実らない年。飢饉年) で乞食が得られにくかったので、神通力を有する者は北俱盧洲などへ行って食物を取ってきて食していた。そこで提婆達多も神通力を学びたいと世尊に頼んだが、邪悪の念を察知されて教えなかった。阿若橋陳如・馬勝・跋陀羅・婆洸波・大名称・円満・無垢・牛王・妙臂にも断られた。十力迦提波は王舎城の鷹窟中に住んでいて、自分の弟・阿難の和尚であるから教えてくれるだろうと頼んだ。十力迦提波はそうした経過を知らないで教えた。時提婆達多初夜後夜警策修習、於後夜分依世俗道獲初静慮、即発神通。転一為多、転多为一、或現或隱、山石壁障身皆通過、不能為礙猶如虚空、入地如水覆水如地、在虚空中踟躕而坐、猶如飛鳥、或時以手摩捫日月。そして提婆達多も食料を取ってきて、仲間に分け与えた。『根本有部律』「僧伽伐尸沙 010」 (大正 23 p.700 中)
- (4) 上記と同じ。『根本有部律』「破僧事」 (大正 24 p.167 下)
- (5) 世尊が侍縛迦 (ジーヴァカ) から受けた二斤の熟酥を食して消化し、なお粥を受けた。提婆達多はこれを真似て、同じ量を侍縛迦に乞い、食して腹痛をおこした。仏力によっ

て病は癒えたが、諸比丘に対しては、仏力ではない、「腹内の酥が自ずから消化したから痛みが除かれたのだ」と忘恩の言を吐いた。『根本有部律』「破僧事」(大正 24 p.174 下)

- 〈6〉そのとき比丘があり名を調達と¹⁾いった。聰明広学、十二年中坐禅入定、心不移易、十二頭陀初不欠減、起不淨觀了出入息、世間第一法乃至頂法一一分別、所誦仏經六万、象載不勝。『出曜經』(大正 04 p.687 中)
- 〈7〉調達比丘所誦經典六万、象載不勝。十二年中恒處巖藪空閑山間、持戒牢固如護吉祥瓶。『出曜經』(大正 04 p.689 上)
- 〈8〉淨飯王は家ごとに一人を出家させよと勅した。……是時斛飯王子提婆達多、出家学道誦六万法聚、精進修行十二年。その後供養の利を求めて、仏や舍利弗、目連、五百阿羅漢の所に行つて、神通を学ぶことを求めたがみな教えなかった。そこで阿難のところに行つた。阿難は未だ他心智を得ていなかったので、兄を敬つて授けた。提婆達多受学通法、入山不久便得五神通。(『十誦律』の説)『大智度論』(大正 25 p.164 下)

[2] 以上のように提婆達多が出家してから破僧に至るまで、どのような修行をしていたかを伝える資料は少ない。この乏しい資料が伝える提婆達多の活動は次の3つの時期にまとめることができるであろう。第1は出家してから善心に修行する時期であり、第2は神通を修する時期であり、第3は名声を得てこれにおぼれる時期である。そしてこの第3は後の破僧に繋がることになる。

[2-1] まず善心に修行した時期について検討する。これを伝えるのは、A資料の〈10〉〈14〉であり、B資料の〈6〉〈7〉〈8〉である。

〈10〉は修羅陀と名づく師について、その教えの如くして漏失することがなかったという。この師は「頭陀行乞食し、補納衣を著け、五通清徹せり」というのであるから、頭陀行を行じたということになる。〈14〉は「善心修行、読経誦経問疑受法坐禅。爾時仏所説法皆悉読誦」したとし、この期間は「12年間」であったとする。

B資料の〈6〉〈7〉〈8〉もすべて12年間とするところは、A資料の〈14〉の影響を感じさせるが、これらは〈6〉が「坐禅入定、心不移易、十二頭陀初不欠減、起不淨觀了出入息、世間第一法乃至頂法一一分別、所誦仏經六万、象載不勝」とし、〈7〉が「所誦經典六万、象載不勝。十二年中恒處巖藪空閑山間、持戒牢固如護吉祥瓶」とし、〈8〉が「出家学道誦六万法聚、精進修行」とするところをみると、頭陀行を修し、禅定に励み、經典読誦を専らとしたというイメージを持っていたことが分かる。これはA資料のイメージとも重なるといつてよいであろう。

なお、破僧において提婆達多は「五事」を主張したとされる。これはまさしく頭陀行的な生活方法であつて、あるいはこれらの記述は、このことと関連するかも知れない。

また、提婆達多は破僧後地獄に墜ちるが、【8】で紹介するように、60劫を経て辟支仏となると受記されたという伝承がある。これは頭陀第一の摩訶迦葉が辟支仏のイメージで見られていたこと⁽¹⁾を連想させるもので、これらの經典編集者の提婆達多イメージも頭陀行者であったことを示すものかもしれない。

(1) 本「モノグラフ」第9号【論文8】「摩訶迦葉の研究」pp.101, 105 参照。

[2-2] もちろんこの「12年間」もそれほど史実として信頼すべきものではないであろうが、その意味を考えておきたい。

先に提婆達多の出家を検討したときに、提婆達多には名前は知られないが「餘次上座」という和尚、あるいは阿難と提婆達多には跋耆瑟吒僧伽という和尚がいたという伝承を紹介した。しかし〈10〉の頭陀行を行っていたという提婆達多の師の名前は「修羅陀」であって、和尚の名とは一致しない。

なお修羅陀比丘については、『増一阿含』013-001は「修羅陀比丘大作阿鍊若行。到時乞食一処一坐或正中食、樹下露坐樂閑居之処、著五納衣或持三衣或樂塚間、勲身苦行、行此頭陀。蒲呼国王の百味の供養を受けて、阿鍊若行を捨て、屠牛殺生を行い、身壞命終して地獄に生まれる」（大正02 p.571中）といい、まるで提婆達多像の投影のようである。

先に述べたように、比丘は出家具足戒を受けてから少なくとも10年間は弟子として和尚もしくは阿闍梨に仕えなければならないという規定があるから、その間は確かに比丘ではあるが、和尚を離れて独自の修行をしたり、弟子を取ることでできるような一人前の比丘ではない。おそらくこの12年間には、この弟子として和尚ないしは阿闍梨のもとで過ごした期間が含まれているのであろう。とするならば、この「12年間」はそれなりに意味のあるものとなる。もちろんこの期間中は、提婆達多には阿闍世を懐柔するとか、破僧などの勝手な行いはできなかったということになる。

もっとも『パーリ律』の「破僧犍度」などではバディヤなどはアヌピヤーで過ごした雨期の間にすでに阿羅漢果を得、阿難は預流果、そして提婆達多は神通力を得たとするが⁽¹⁾、説話的時間の短縮が行われていると考えるべきであろう。

(1) 『四分律』は阿奴夷界から占波国に移ってから、『五分律』は彌那邑阿窰林下から跋提羅城に移ってから、ということになっている。

[2-3] このように和尚あるいは阿闍梨のもとで善心に修行した12年間ほどの後に、提婆達多は神通力を得るための修行をしたようである。それを述べるのが、A資料の〈10〉〈14〉と、B資料の〈8〉、それに〈3〉もそのように読める。提婆達多はその動機はどうか、和尚のもとでまじめに修行した10年余の後に、より厳しい修行を行って、しかる後に〈9〉が「有大神力有大威勢」とし、〈11〉が「智者 (paṇḍita) と称され、身を修めた者 (bhāvitatta) と崇められ、誉れは焰のように高かった」とされるように、名声を獲得できるような力量を身につけたのであろう。和尚や阿闍梨の弟子の時代は、和尚や阿闍梨の影のような存在に終始しなければならないはずであるから、このように目立つ活動は、和尚・阿闍梨から独立してからでなければならない。

この期間がどれくらいか判断する材料を持たないが、破僧の心を起こすまでということになろう。議論を先取りするようであるが、破僧はおそらく釈尊の成道後37年、釈尊72歳の時であって、提婆達多と釈尊の年齢差が25歳であったとすると、このとき提婆達多は47歳になっていたことになる。この破僧の前に提婆達多は阿闍世に取り入る期間があり、これを5年と仮定すると、破僧の心を起こすのが42歳ということになる。先に推定したように提婆達多が20歳で出家し、12年間は善心に修行したとすると、その時提婆達多は32歳になっていたことになるから、計算上からは神通力を得るための厳しい修行は32歳から42歳までの10年間ということになろうか。もちろんこれは現時点の仮説的な計算に止まる。

[2-4] 上記の資料の中には含めなかったが、後に検討する破僧事件の中で、舍利弗が釈尊に「王舎城において、提婆達多のなすことは仏法僧ではない」と顕示せよと命じられたとき、舍利弗は次のように答えたとされている。これはパ漢の原始聖典に共通する第1次水準資料である。

Vinaya 「破僧毘度」(vol.II p.189) : 自分は以前に王舎城において、提婆達多をゴードイプッタは大神通あり、ゴードイプッタは大威力ありと讃歎しました (pubbe mayā bhante Devadattassa Rājagahe vaṇṇo bhāsito mahiddhiko Godhiputto mahānubhāvo Godhiputto)。どのように提婆達多を顕示すればよろしいか。

『四分律』 「僧残 010」 (大正 22 p.593 上) : 世尊我當云何在白衣衆中說其惡。何以故。我本向諸白衣讚歎其善言、大姓出家聰明有大神力、願貌端正

『五分律』 「僧残 010」 (大正 22 p.019 上) : 我昔已曾讚歎調達、今日如何得毀譽

ここに使われる「大神通あり、大威力あり」との褒め言葉は、釈尊を褒めるときを含めて数多くの人たちに対して使われており、必ずしも提婆達多のみを褒めるための言葉ではないが⁽¹⁾、しかしこれほどリアルな場面での用例はほとんどなく、またこれが舍利弗が発した言葉として残されているのはそれなりに注目すべきであろう。

また *Udāna* 001-004 (p.004) には、サーリプッタ、マハーモッガラナ、マハーカッサパ、マハーカッチャーヤナ、マハーコッティタ、マハーカッピナ、マハーチュンダ、アヌルッダ、レーヴァタ、アーナンダの 10 人の尊者と共に提婆達多の名も挙げられたうえで、これらの比丘たちを釈尊が、「邪悪の法を除き、常に正念にして往来し、繫縛を尽したブッダ (khīṇasaṃyojanā buddhā)⁽²⁾、彼らこそは実にこの世におけるパラモンである (te ve lokasmiṃ brāhmaṇā)」とのウダーナを唱えられたとしている。これによれば、提婆達多は釈尊自身からも讃められたことになる。ただしこれは PTS 版のみであって、ビルマ版 (Vipassana Research Institute による *Chaṭṭhasaṅgāyana CD version 3.0* を参照させていただいた) およびシンハラ版 (Sri Lanka Tripitaka Project が *Buddha Jayanti Tripitaka Series* 版にもとづいて作成した電子テキストデータ <http://jbe.gold.ac.uk/palicanon.html> を参照させていただいた) のパーリテキストでは提婆達多の名は挙げられていない。ちなみにビルマ版ではアーナンダのかわりにナンダが入る。また内容は全く異なるが、*MN.118 Anāpānasati-s.* (「入出息念経」 vol.III p.078) や *AN.006-002-017* (vol.III p.298) にはここに挙げられているサーリプッタなどの名前が列挙されているが、ここには提婆達多の名はない。したがってこの *Udāna* を信じることはできないかも知れない。

このように確かに提婆達多は出家ののちしばらくの間は和尚・阿闍梨のもとで善心に修行し、独立してからは智慧すぐれ、そして神通力を有するようになって、舍利弗をさえ (あるいは釈尊をさえ) 讃歎させるものを身につけるようになったのである。

(1) パーリ聖典のみを対象に調査してみると、釈尊を褒める言葉としては以下の 22 例が見いだされる。*DN.014 Mahāpadāna-s.* (「大本経」 vol.II pp.008, 009)、*DN.016 Mahāparinibbāna-s.* (「大般涅槃经」 vol.II p.129)、*DN.025 Udumbarikasihanāda-s.* (「優曇婆羅子吼经」 vol.III p.040)、*DN.028 Sampasādaniya-s.* (「自欢喜经」 vol.III p.115)、*MN.049 Brahmanimantāṇika-s.* (「梵天请经」 vol.I p.330)、*MN.058 Abhayarājakumāra-s.* (「无畏王子经」 vol.I pp.392, 394)、*MN.123 Acchariyabbhutadhamma-s.* (「希有未曾有法经」 vol.III pp.118, 119)、*SN.006-001-006* (vol.I p.147)、

SN.021-002 (vol.II p.274) 、 *SN.022-078* (vol.III p.085) 、 *SN.042-009* (vol.IV p.322) 、 *SN.051-032* (vol.V p.289) 、 *AN.003-008-081* (vol.I p.229) 、 *AN.004-004-033* (vol.II p.033) 、 *Udāna 002-008* (p.016) 、 *Udāna 007-009* (pp.078, 079) 、 *Udāna 008-005* (p.083) 、 *Suttanipāta 003-006* (p.093) 、 *Itivuttaka* (p.015) 、 *Vinaya* 「僧残 010」 (vol.III p.171) 、 *Vinaya* 「大犍度」 (vol.I pp.026, 027, 028, 029, 030, 031, 032) 、 *Vinaya* 「破僧犍度」 (vol.II pp.193, 196) である。

釈尊のほかに月と太陽に対して用いられることが多く、次の 23 例がある。*DN.002 Sāmañña-phala-s.* (「沙門果経」 vol.I pp.078, 079) 、 *DN.010 Subha-s.* (「須婆経」 vol.I pp.209, 212) 、 *DN.014 Mahāpadāna-s.* (「大本経」 vol.II pp.012, 015) 、 *DN.028 Sampasādaniya-s.* (「自歆喜経」 vol.III p.112) 、 *DN.034 Dasuttara-s.* (「十上経」 vol.III p.281) 、 *MN.006 Ākañkheyya-s.* (「願経」 vol.I p.034) 、 *MN.012 Mahāsīhānāda-s.* (「師子吼大経」 vol.I p.069) 、 *MN.073 Mahāvaccagotta-s.* (「婆蹉衢多大経」 vol.I p.494) 、 *MN.077 Mahāsakuludāyi-s.* (「善生優陀夷大経」 vol.II pp.018, 019) 、 *MN.108 Gopakamoggallāna-s.* (「瞿默目犍連経」 vol.III p.012) 、 *MN.123 Acchariyabbhuta-dhamma-s.* (「希有未曾有法経」 vol.III pp.120, 123) 、 *SN.012-070* (vol.II pp.121, 126) 、 *SN.016-009* (vol.II p.212) 、 *SN.051-011* (vol.V p.265) 、 *SN.051-017* (vol.V pp.274, 275) 、 *SN.056-046* (vol.V p.454) 、 *AN.003-006-060* (vol.I p.170) 、 *AN.003-010-100* (vol.I p.253) 、 *AN.004-013-127 ~ 128* (vol.II I p.013) 、 *AN.005-003-021 ~ 029* (vol.III p.017) 、 *AN.006-001-002* (vol.III p.280) 、 *AN.010-007-069* (vol.V p.129) 、 *AN.010-010-097~098* (vol.V p.199) である。

この外の人物や神に用いられることもある。目連が比較的多く、*MN.037 Cūḷataṇhāsāṅkhaya-s.* (「愛尽小経」 vol.I pp.254, 255) 、 *SN.021-003* (vol.II p.276) 、 *SN.051-014* (vol.V pp.270, 271) 、 *SN.051-031* (vol.V p.288) の 4 例がそれである。

その他は以下の通りである。*DN.017 Mahāsudassana-s.* (「大善見王経」 vol.II p.186) は釈尊が入滅されたクシナーラーの過去世の大王である大善見王に対して、*SN.006-001-005* (vol.I p.145) は目連、カッサバやカッピナ、阿那律に対して、*Udāna 004-004* (pp.039, 040) では舍利弗と目連に対して、*MN.073 Mahāvaccagotta-s.* (「婆蹉衢多大経」 vol.I p.497) ではヴァッチャゴッタ比丘、*SN.021-006* (vol.II p.279) 、 *Udāna 007-005* (p.076) ではラクンタカ・パッディヤ比丘、*SN.021-011* (vol.II p.284) ではマハーカッピナ、*SN.021-012* (vol.II p.285) ではカッピナの弟子の 2 比丘、*Vinaya* 「皮革犍度」 (vol.I p.180) ではサーガタ比丘、*DN.016 Mahāparinibbāna-s.* (「大般涅槃経」 vol.II p.108) 、 *AN.008-007-070* (vol.IV p.312) は神 (deva) 、 *MN.049 Brahmanimantāṅika-s.* (「梵天請経」 vol.I p.328) はバカ梵天、*AN.006-004-034* (vol.III p.331) 、 *AN.007-006-053* (vol.IV p.074) はティッサ梵天 (Tisso brahmā) 、 *AN.007-005-050* (vol.IV p.065) はヴェッサヴァナ (Vessavaṇa) 、 *DN.014 Mahāparinibbāna-s.* (vol.II pp.072, 073) 、 *AN.007-003-020* (vol.IV pp.017, 018) はヴァッジ族に対して、*SN.006-002-004* (vol.I p.156) はシキン仏の弟子アビブーに対して、*DN.009 Poṭṭhapāda-s.* (「布吒婆樓経」 vol.I p.180) 、 *DN.011 Kevaṭṭa-s.* (「堅固経」 vol.I p.213) 、 *SN.051-016* (vol.V p.273) はぼんやりと沙門、婆羅門に対して、*Udāna 002-001* (p.010) はピンビサーラとパセーナディに対して用いられている。

また *Udāna 004-009* (p.046) はウパセーナ・ヴァンガンタブッタが、*DN.018 Janavasabha-s.* (「闍尼沙経」 vol.II p.214) ではサナンクマーラ梵天が、*SN.006-001-006* (vol.I p.147) は梵天が、*Therīgāthā* v.520 (p.174) ではスメーダー尼 (Sumedhā) が自分自身に対して使っている。

また mahiddhika という言葉のみを使って褒められる場合もある。目連に対してのケースが

比較的多く、*SN.008-010* (vol.I p.195)、*SN.014-015* (vol.II p.155)、*Theragāthā* v.1250 (p.112) がある。その他に、*Theragāthā* v.429 (p.046) は竜王 (*pannaginda*) に対して用いる。また *Theragāthā* ではその要目に用いることが多く、2句ずつの集成の第1章の要目 (p.019) ではウッタラ (*Uttara*)、ピンドーラ (*Piṇḍola*)、ヴァッリヤ (*Valliya*)、ティーリヤ仙人 (*Tiriyo isi*)、アジナ (*Ajina*)、メーラジナ (*Meḷajina*)、ラーダ (*Rādha*)、スラーダ (*Surādha*)、ゴータマ (*Gotama*)、ヴァサバ (*Vasabha*) が、第1章の要目 (p.022) ではチュンダ (*Cunda*)、ジョーティダーサ (*Jotidāsa*)、ヘーランニャカーニ (*Heraññakāni*)、ソーマミッタ (*Somamitta*)、サツバミッタ (*Sabbamitta*)、カーラ (*Kāla*)、ティッサ (*Tissa*)、キンピラ (*Kimbila*)、ナンダ (*Nanda*)、シリマツ (*Sirimat*) が、12句の詩句の要目 (p.064) ではシーラヴァット (*Silavat*)、スニータ (*Sunita*) が、13句の詩句の要目 (p.066) ではソーナ・コーリヴィサ (*Soṇa Koḷivisa*) が、14句の詩句の要目 (p.068) ではレーヴァタ (*Revata*)、ゴータッタ (*Godatta*) が、16句の詩句の要目 (p.070) ではコンダンニャ (*Koṇḍañña*)、ウダーイン (*Udāyin*) が、60句の詩句の要目 (p.108) では目連が *mahiddhika* であるとされている。

また *mahānubhāva* のみの用例を調査してみると、*DN.021 Sakkapañha-s.* (「帝釈所問経」 vol.II pp.272,273) ではゴーパーカが自身、*DN.030 Lakkhana-s.* (「三十二相経」 vol.III p.176) では三十二相を具えた者、*MN.116 Isigili-s.* (「仙吞経」 vol.III pp.070, 071) は諸辟支仏、*SN.008-009* (vol.I p.194) と *Theragāthā* v.125 はコンダンニャに対して用いられている。

- (2) このブツダは明らかに舍利弗などの仏弟子をさしている。提婆達多もこれに含まれるわけである。並川孝儀氏は『ゴータマ・ブツダ考』(大蔵出版 2005年12月 p.024)で、このような用法として他に、*Suttanipāta* のv.386の「諸々のブツダは時ならぬ托鉢には出歩かない」を上げておられる。いずれにしても特殊な用法と考えるべきであろう。

[2-5] 提婆達多が名声を得、その存在を知られるようになったことは〈4〉〈5〉〈6〉〈7〉〈8〉〈10〉〈11〉などが伝える。その他に【7】「破僧」を検討するときの資料にも含まれる。その他にも本論文で紹介したすべての資料の各所に散見されるものを参照願いたい。そしてこの名声が破僧に繋がっていくわけである。